

2 番目という存在

華

ひとつの恋が終わる時、もう恋なんてしないと誓う。

熱しやすく冷めやすいという典型的な性格の私は、恋においても、とことんその人を愛してしまう。そして、ふとしたことをきっかけに、恋した人に対する情熱が冷めてしまう。あつけなく、その人をキライになる。

私は、本物の恋をしたことがないのかもしれない。

恋をするのに、理由はいらぬ。それはなんの前触れもなく突然やってくる。いくつになっても、恋のはじまりは、まるで花が咲きほこる春。

四六時中、恋い焦がれた人のことを、あれやこれやと考える。恋のパワーは、私にとつともないエネルギーを注いでくれる。とにかく仕事は、はかどりはかどってしまう。人にとつとも優しくなれる。いつもにこやかな顔と心になる。自然の雄大さ、清々しさに感謝したくなる。何よりも、この世に生んでくれた両親にありがとうと言いたくなる。恋のはじまりは、私を素直にさせる。

「これであなたもソウルメイトに出会えます。」

未婚女性にとつて、ついつい心惹かれるこの言葉。書店やインターネットをにぎわす謳い文句。白馬に乗った王子様なんて待つてはいない。とはいえ、心底気の合う運命の人はいると信じていたりもする。

秋も深まったある日。

何でも試してみないと気がすまない性分の私は、早速「運命の人に出会える」というプログラムを実行する。今日は、美容院に行く日、ピタピタした服を着て女度を上げる日、ホテルのラウンジで優雅にお茶をする日……。半信半疑でそのプログラムを試してみた。すると、不思議と心がウキウキしてきた。そして、自然と運命の人に出会えるかも、と思うようになっていった。

そのプログラムを試し3か月を迎えた時、トントントンと恋の進展があった。知人を通して知り合ったXさんに、無性に会いたくなつた。お食事でも、という私からの突然の誘いに、声をかけてもらいうれしかったと、デートをすることになる。

私より年上のXさんは、仕事も人生においても経験が豊富だった。初めてのデートで、不思議と仕事の悩みまで打ち明けていた私。彼は、とても話しやすく、なんでも話を受け止め聞いてくれた。

その頃の私は、リストラにあうかあわないかで2年間ほど悶々としていた。こんな会社をはやく抜け出したい。だけど転職活動しても、ひっかかる会社がない。少々やけになつていた私に、Xさんは、「今のチームで、会社で、誰にも負けないと言える仕事はあるの?」と、問いかけてきた。無言でいる私に、「誰にも負けないと思うものが出来た時、きっと、他の会社を受かるだろうし、何かで変わると思うよ。どうせ仕事をするなら、一流をめざせ!」と更に投げかけてきた。

私は、何も言葉を返せず、ただただ、涙が溢れて止まらなかつた。彼の言葉で、心のかえが一気に崩れていった。

その日以降、私は仕事に対する目線が大きく変わることになる。リストラされるかもと、日々おびえるのはやめた。やけになるのはやめた。この会社に留まれる限り、私にしか出来ないことを追求しようと、心持が大きく変化した。仕事場での周囲に対する思いも変わった。本に書いてあつた「運命の人の言葉で、人生が開ける」とはこのことだ!と信じて疑わなかつた。

Xさんとは、共感することが多かつた。食べることに關しての、些細なこだわり、気づかい、サービスやマナー、読書、映画、音楽、温泉。リラックスしたい時の趣味も一緒だつた。正にこの人が運命の人だ!と確信した。

そう、恋は盲目。

今にして思えば、あれっ?おかしいなと感じた疑問を、あの時なげたずねなかつたんだろう。ひとつの恋が終わると、女はとても冷静に過去を振り返ることができる。

私とデートをするようになった時、Xさんは3人の子どもと奥さんとの生活にピリオドを打っていた。別居中で、離婚調停をしていた。のんきな私は、それは私と出会う前の出来事。離婚もそろそろ成立するからと、あまり気にも止めていなかった。とにかく、彼の

魅力の虜になっていた。

いくつかの会社経営に携わり、とにかく忙しかった。週末を利用し会うようになって、デートの後もすぐ仕事に戻ってしまった。週末にしか会えなかったけれど、日々のメールのやり取りでグングン彼との距離は縮まっていった。私は、次第に彼の悩みも手に取るようわかったつもりになっていた。

Xさんとは、からだの関係を持つのに時間はかからなかった。お互いの満たされない部分、さみしさや手に入れたくても入らないモノなどを満たすのに、そうなるのが自然の成り行きだった。両親や友人から、どんなに言葉でたくさん愛情をもらっても満たされなかったモノが、Xさんと肌を合わせることで、あっけなく満たされていった。彼の腕の中で、快楽に溺れていった。

そう、恋は盲目。順調にスタートした恋だと思っていた。

しかし、次第に目が覚めていくことになる。

彼の態度や言葉から、心にひっかかる歪みを感じずにはいられなかった。

週末に会うと、決まって翌週は、苦しくて眠れないと、真夜中にメールが入るようになった。僕は、キチンと妻と別れていないのに、キミと会っていいのだろうか？　こんな僕は、だめだ。死んでしまいたい。そんな言葉を口にするようになった。

もうすぐきちんと奥さんと別れられるのに律義な人だなどはじめは思っていた。

休みも取らずに働き通しの真面目な彼。そんな人が、死にたいと言っている。私の性分から、放っておけなかった。こんなに一生懸命真面目に生きている人を支えたい。彼が感じていさみしさと人恋しさから救ってあげたい。体調をよくしてあげたい。結婚生活がつかったからといって、あっけなく、命を絶って欲しくない。生きていたら、もっともっと楽しいことがあるんだと、知ってもらいたい。幸せにしてあげたい。

彼にどっぷり恋をしてしまった私は、彼からの「死にたい」メールが夜中に来る度に、眠さも抑え、とことん付き合った。あなたは、徳があり、穏やかで、心やさしい、賢い人。仕事での評価も高い人。素晴らしい人だよと、励まし、自信を取り戻してもらおう、と必

死だった。

そう、恋は盲目。

結局のところ、彼は二股をかけていた。

奥さんと別居をし、もうすぐ離婚が成立する運びになった時に、私から食事の誘いがあった。そして、同時に片思いだった女性が、彼の方を振り向いた時でもあった。

そんなことは露知らず、私は持ち前の世話好きな性格がウズウズし、恋を成就させる為に動きまわった。オリーブオイルにこだわる彼好みのレストランを探したり、週末は、彼の都合に必ず合わせた。デートを繰り返しても、彼の中で私は常に2番目だということに、なかなか気付かなかった。

週末に会えば会うほど、彼からのメールが夜中に頻繁に送られてきた。自己嫌悪、自己喪失感、自殺願望が強くなっていった。

とある日、夜通しメールのやり取りが続き、明け方、電話が鳴った。この時、私はすでに精神的に参っていた。そして、遂に彼の口から、別に好きな人がいることを聞かされた。止めに、私の存在は、彼の中で常に2番だと言われた。

この言葉を聞き、私の中で疑問に感じていたことがつながった。こんな男に入れ込んで、私はなんて愚かなんだ。そうは思っても、この時、彼からの連絡を断つことをしなかった私。「お人よし」、ただその一言に尽きるのに、猛烈に愛した人が悩んでいるのを、放っておけなかった。

徳があり、穏やかで、心やさしい、賢い男。ただ、さびしがり屋で愛に飢えている。そんな人が、自己喪失感から、命を断とうとしている。私は、彼が自信を取り戻すまで、更にメールや電話に付き合った。自分の気持ちに蓋をし、無理矢理彼の親友になったふりをした。そして、励まし続けた。

暮れも押し迫ったある日、一本のメールが入る。

「大好きな人と、新年から一緒に暮らすことになりました。キミのお陰で、自分に自信が持てました。本当にありがとうございます、感謝しています。」

私はこの時、彼と初めてデートをした六本木にいた。メールを読むやいなや、大粒の涙が頬を伝った。そして、やっと目が覚めた。同時に、自分の馬鹿さ加減に、嫌気がさした。

別の意味で、運命の人となった彼との出来事。皮肉にも、仕事場ではリストラにあわず、上司からの評価はグングンあがっていった。いまだに、恋は休憩中。そう心に看板をぶらさげ、仕事に励む日々。

(了)